

令和7年度 特別の教育課程の編成の方針等について

埼玉県		
学校名	管理機関名	設置者の別
戸田市立戸田東小学校	戸田市教育委員会	公立

1. 特別の教育課程の内容

(1) 特別の教育課程の概要

本市では、これまで小学校第3・4学年において「総合的な学習の時間」を年間35時間削減した「英語活動」を設定してきた。また、第1・2学年でも「英語活動」を学校教育法施行規則第51条に定められる授業時数以外で年間20時間程度実施し、成果を上げてきた。

新学習指導要領の完全実施を見据え、新たに、これまでの取組をさらに発展させるため、以下の内容で取り組む。

- ① 小学校第3・4学年において、現行の35時間実施している英語活動に、総合的な学習の時間を年間35時間削減し、35時間を加えた英語活動を実施する。
- ② 本市の研究組織である戸田市英語教育研究推進委員会は、①の時間を活用し、コミュニケーション能力を育成するためカリキュラム及び教材を研究・開発する。

(2) 学校又は地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

(3) 特例の適用開始日

平成15年4月1日 特例の適用開始

平成21年4月1日 変更

令和2年4月1日 変更

(4) 取組の期間

令和12年3月31日まで

2. 特別の教育課程の実施状況

- ・ 小学校3・4年生において「総合的な学習の時間」を年間35時間削減し、その時間を英語活動として実施した。(週1回の45分授業と週3回の15分モジュール授業)
- ・ 45分授業とモジュール授業がつながる単元構成を工夫した。
- ・ 45分授業では、ALTと連携し、「ふれる・なれる・親しむ」という流れでコミュニケーションに慣れながら、自分の考えや気持ちを伝え合う力を育成した。
- ・ 新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業改善が進むよう、戸田市英語教育推進委員会が開発した「英語教育指導用ルーブリック」や「英語教育ブックレット2022」を活用するよう教職員に周知した。
- ・ 戸田市英語教育推進委員会が開発したCAN—DOリスト改訂版を活用しながら、学習到達目標を児童が達成できるよう支援した。
- ・ ICTを活用し、作業を効率化し、その分の時間をコミュニケーション活動などの時間に充てた。
- ・ 15分モジュール授業では、インプットを重視し、45分授業でコミュニケーション活動の時間を確保できるようにした。

- (3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況
- ・学校だより、ホームページや Facebook 等を活用して、英語活動の様子を積極的に情報発信した。
 - ・学校公開では外国語活動や外国語科の授業参観を公開した。
 - ・保護者会や学校運営協議会でも英語教育の取組を紹介した。
 - ・戸田市の広報紙や広報番組「ふれあいとだ」にも、英語教育の特集が組まれたので、市民へ情報発信した。

3. 実施の効果及び課題

- (1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係
本特例は「世界で活躍できるとだっ子の育成」を目指し、小中一貫の英語教育をとおして、グローバル力と異文化力を育成するため、コミュニケーション教育を推進するものである。

児童の気持ちや考え等（能力）が発信可能なコミュニケーションの場面を重視した活動により、本校の学校目標「グローバル社会でたくましく生き抜き、活躍できる児童生徒の育成」に迫れている。モジュールの時間でインプットを多くすることにより、45分授業でインプットの時間を短縮し、アウトプットの時間をより確保することができた。それにより、児童は自信をもって会話をすることができた。その効果は、1月に実施した英語実態調査にも表れ、積極的にALTと会話しようとする姿につながったと考える。さらに、会話内でリアクションをすることを指導することで、人権意識の向上や、豊かな心の育成によい影響を与え、互いを認める素地も養われたと考える。

学年で外国語を担当する教員を指定したことで授業の流れを統一することができた。今後、校内研修を充実させるなど学校全体での英語活動のさらなる充実を図る必要がある。また、日常の授業の様子を保護者など学校外に紹介する機会を増やし、家庭地域と連携した学びをさらに推進していく。

- (2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

本校ではALTが常駐配置されているため、児童は授業以外でもネイティブ・スピーカーの本物の英語を体感し、実生活に近い状況での英語によるコミュニケーションを経験したり、異文化にふれたりしている。そのため自然と他国を尊重する心を育てている。また、学年末に実施したALTとのスピーキング実態調査では、多くの児童が問いかけに対して積極的にコミュニケーションを図れていた。英語活動で慣れ親しんだ語彙や表現を活用して、自己開示・自己発揮できる児童が増えており、グローバル社会で求められるコミュニケーション能力が着実に育成できており、特例校の取組の効果が表れている。一方で、英語に対して苦手意識をもっている児童や簡単すぎてつまらないという児童も一定数いる。様々なレベルの児童が楽しんで英語コミュニケーションを取れるようなレッスンプランを考えていく必要がある